

第一回講義への学生のコメント

今回の授業では、そもそも哲学とは、ギリシア語の愛(フィリア)と知恵(ソフィア)であるということが重要だと考える。では、この「愛」とは何なのだろうか。授業でも取り上げられていたように、「愛」は仏教でいう煩惱にあたり、欲望や、欲求等を意味するため悪い意味がある。しかし現代では、この言葉に対し、ポジティブな印象をもつ人が大半を占めるだろう。それは、キリスト教的な“隣人愛”や、“人類の愛”などの思想が影響しているのかもしれない。今日、世界各地で戦闘や、テロ行為が頻発している。そのたびに注目されるのが、芸術家や、音楽家、政治家等の有名人の声明である。そこでよく書かれるのは、人はみな愛し合いなさいなどの啓発だ。この言葉が世界中に広まるわけであるが、いささか「愛」という言葉が乱用されすぎて、本来の意味があい曖昧なままであるように思う。したがって、先生はこの「愛」とは何だとお考えになるのか、お答えいただきたい。

コメント [y1]: 「この」愛、の指示対象が不明ですが、「フィロソフィー」の語源としての「フィリア」について言うと、単に「好き」というだけの意味です。

そもそも哲学とは、プラトンが最初に使ったギリシャ語の「愛」と「知恵」が合わさってできた **philosophy** という言葉から始まった。「哲学」という語訳は西周によってなされた。

人々は哲学といわれると「正しさは人それぞれだ」、「経験がすべてを決める」、「実在とは目に見えるものだ」と考えがちであるが、実はこれらはすべて誤解である。哲学の言う正しさとは普遍的であることであり、個人の経験によって物事が決まるのは必要な基礎や土台があるときだけである。また、経験に先立つものも存在すると考えられている。さらに、実在とは目で見ることができず、感覚することもできない。目に見えない実在である「学」や「知」の普遍、つまり正しさを求めて哲学は進歩してきた。

この哲学の進歩に大きく関わったのが哲学者、アリストテレスである。彼の著作には、自然学からはじまり政治学、倫理学、動物学、形而上学などほぼすべての領域の知識が含まれている。これらはのちに外国（←12世紀以降、西ヨーロッパ）へと伝えられ、諸学の基礎となった。また、現代に伝わる哲学用語も大部分は彼によって作られたとされている。近世の哲学者で「われ思う、ゆえにわれあり」という有名な言葉を残したデカルトもまた広い領域の知識を網羅している。このように、哲学とはひとつの領域というよりも、諸科学を生み出した「学問の祖」というべき存在であり、総合科学という分野とも非常に似たところに位置しているように感じた。

コメント [y2]: なぜそう感じたのか、理由を書くようにしましょう。

哲学の歴史や哲学に対して普段私たちが思っていることと実際の哲学との違う点などについて知ることができた。また、哲学はもともと自然科学なども含み、学の歴史を理解するには現代的な区分を前提とせず時代ごとの学の全体像をとらえることが必要ということがわかった。私は哲学について学ぶことは重要であると考えている。なぜなら、哲学はもともと科学なども含み、さまざまな分野があるからである。このようなことは多くの知識を手に入れるのに役立つ、そこから幅広い知識などをつかかってさまざまなことに生かすのに役立つであろうと考えられる。

コメント [y3]: 「現代の言葉で言えば自然科学に相当するような領域」という方が正確です。

今回の授業で、哲学とは学問的な「知」への愛だと学んだ。また、理性は英語で reason だと学んだ。高校の授業でプラトンの魂の三分説を学んだが、当時は一つ一つの言葉の意味をよく理解できていなかった。しかし、今回の授業で英語に変換するとよくわかると知った。理性は、英語で reason。調べてみると、気概は strong spirit、欲望は desire。理由が強い精神をコントロールし、欲をコントロールする。この理由に対応するのが知恵であり、強い精神が勇氣、欲が節制に対応し、正義となる。今回の授業のおかげでやっと理解することができたと感じた。

コメント [y4]: 「強い精神」という言葉の意味は、よく分かりますか? 「精神」って、なんでしょう? (そのうち取りあげます)。

プラトンは正義実現のため哲人政治を述べたが、先生はこの哲人政治に賛成しますか反対しますか?

コメント [y5]: 具体的にどのようなものだとあなたは理解しているのか、まとめてください。

私は賛成する。その理由は、知恵あるものが国の先頭を行くべきだと考えるからだ。確かに人類平等は大切だが、知恵のあるリーダーが国を引っ張ることが国民を幸福に導くと考える。しかし、そのためには、リーダー自身も、リーダーを選ぶ国民自身も知恵のあるものに成長する必要があると思う。

コメント [y6]: そう「考える」理由を書くようにしましょう

コメント [y7]: そう「思う」理由を書くようにしましょう。

今回の授業では、哲学とはなにかについて学んだ。私は高校生の時、世界史の授業も倫理の授業も取っていなかったので哲学については詳しく知らないが、ぼんやりと目には見えないものを研究する学問であると考えていた。しかし、哲学とは幅広い分野を含む学問であり、自然学、形而上学、政治学、倫理学、心理学、動物学、天文学などあらゆる学問がかかわっている、いわば総合科学のようなものである。これは昔の哲学だけに当てはまるわけではなく、「われ思う、ゆえにわれあり」で有名な近世の哲学者、デカルトには哲学だけでなく宇宙学や屈折光学、幾何学などの著作があり、やはりおよそすべての領域を含む学問だと言える。哲学は目に見えない、つかみどころのない学問だと感じていたが、今

回の授業で哲学の全体像をなんとなくだが、理解することが出来た。ただ、高校からの予備知識がないためこれからの授業でさらに理解を深めたい。

哲学を学ぶというのは、およそすべての分野の知識を正しく考えるということである。現代の自然科学における研究の問題意識や前提を含む西洋思想は哲学において派生した。このように膨大な知識を領域とする哲学であるが、これらの知識を体系化し、知恵とし、愛を持つことで初めて哲学と言えるのではないだろうか。

コメント [y8]: なぜそう言えるのか、理由を書くようにしましょう。

今まで考えた「哲学は人によってそれぞれ」が全く違って、哲学の正しさは普通的、そして哲学というのは、実在は目に見えない感覚できない実在について探求する学問です。古代ギリシャの哲学者「アリストテレス」が書いた「哲学者」という本の中に、およそ全ての知識の領域を含んでまれていますが、19世紀以降になると哲学の意味がからだんだん自然科学の意味に近づいてが分離してきました。自分の感じでは哲学というものは文系の学問ではない、理系の学問でもない、理性と感性を両方揃った深い学問だと思っております。大学生にとってはまだ世の中のことを知らない、そして積み上げた知識もそこまで厚くないため短時間に哲学を身につくことが難しいと思っております。

コメント [y9]: なぜそう思うのか、理由を書くようにしましょう。
なお、授業の内容を若干誤解しているようです。プリントやウェブページで復習しておきましょう。

哲学者が知恵を愛するために自然科学全般へと繋がっていき、自然科学が知恵を深める目的で発展したのだと理解した。

1. 自然化学科学は哲学から派生し哲学はおよそすべての領域を持っている。通常の哲学史はプラトン、アリストテレス、デカルトなどの著作の現代から見て哲学に見えるものをつなげて作ったものである

2 私は哲学の正しさを普遍的という考えに共感しました。なぜなら、現代の常識という言葉は多くの人間に通づる考え方のことを示していると考えるからです。

「正しさ」は普遍的なものであり、経験に先立つものが存在し、哲学において実在とは、こと近世までの西洋においては、神学的で感覚できないものであった。また、明治期に入るまで哲学とは総合科学の性質を帯び、学問全般にわたるのであった。

以上が自分が今回の授業で得た知識である。

そのなかで一つ疑問に思ったことが、「正しさは普遍である」と仰られた教授の言葉である。自分の中で哲学と倫理の定義わけがはっきりしていないのが原因であり、教授が当日の総合科学入門講座で取り上げていらしゃった原発賛成反対問題などの諸問題における正しさというのは、各人がどのような思考をし何を重視するかによって変化しうるものではないかと考えている。それらの考え方、倫理というものは哲学とどう違うのかを教えてくださいと自分は考える。

今回の講義は哲学の由来と変遷だった。元来、Philosophy はギリシア語におけるフィリア(愛)とソフィア(知恵)が合体した語であり、意味としては「知識愛好」というようなものだった。その意味通り、Philosophy が表す知識の範囲は、ほとんど全ての範囲に及んだ。古代ギリシアの哲学者、アリストテレスの著作は自然学、形而上学、政治学、倫理学等、多方面に及ぶ。また、『近代哲学の父』と称されるデカルトも、幾何学や心理学といった、現在から見れば哲学とは異なる学問についての著作を残している。また、自然科学をはじめとする諸科学の起源として哲学があった。自然科学の中では「自然法則の実在」や「実験的方法による証明」などの前提が例として挙げられる。このように、Philosophy がかつては総合科学とも呼べるような存在だったことを念頭に置かなければ、哲学が歴史の中でどのような問題意識で、どのような問題を扱ってきたかは、的確に把握することができない。

私は、以前より哲学に興味があった。しかし、深く踏み入って、体系的に学ぶことは無かった。高校の倫理の授業でも、ただ各々の哲学者の思想とそれに関わる用語を断片的に覚えるだけだったし、その延長線上で自主的に調べたことも、あくまで記憶に留めるだけで、それらを比較したり、現実社会に当てはめて考たりすることは少なかった。

そのように哲学に接していた2017年11月二十四日に、徳島大学総合科学部の公開セミナー、人文知・社会知への誘いの第九回の講座に参加した。その時の講座の題目は、『哲学は何のために—哲学への招待—』だった。講師は石田三千雄教授。哲学の存在意義を、現代ドイツ哲学、主にフッサールの思想を用いながら論じるという講義だった。私は、この講座で出てきた「厳密な学としての哲学」と「世界観哲学」という言葉が印象に残っている。「厳密な学としての哲学」は1911年にフッサールが発表した論文でもあり、哲学はいわば諸学問を統一して、全体を論じる普遍的な学問であるという主張だ。対して、「世界観哲学」とは人類の歴史の流れの中で、生まれては消える文化の産物であり、相対的な存

コメント [y10]: 言葉の定義として、「正しい」というのは「客観的・普遍的に正しい」という意味です。それぞれの人が「正しい」と思っているということと、客観的に「正しい」ということは別のことです。現実的に言って「客観的な正しさ」を捉えることは難しいですが、「正しさは各人が勝手に決める」という前提に立ってしまうと、対話も発展ありません。価値観であっても、「人間の生命・生活は尊重すべき」などの点については普遍性があるでしょう。詳しくは、私の『人をつなぐ対話の技術』という本を読んでみてください。生協で売っています。

在である。これを通俗すれば人それぞれの人生観にまで細分化される。私は哲学とはこの「世界観哲学」ことであると考えていた。倫理の教科書を見ても、それぞれの哲学者が思想を繰り広げ、哲学によって何かに答えが出るなど思わなかった。哲学史の中でも、哲学が進んでいくというより、より多くの思想に溢れて混沌としていくイメージがあった。しかし、フッサールはこれを是とせず、学問とは長時間的、つまりはどの時代にも通用するものではないと主張している。

他の学問と同じく、普遍的で時代に左右されない答えがある。この主張は当時の私にとっては思いもよらないものだった。以来、私は「厳密な学としての哲学」を学んでみたいと思っている。現在、技術の進歩や国家の対立によって、AI、出生前診断、貧富の差、紛争等、様々な問題を孕む事象が世界にある。これらに挑むとき、普遍的かつ全体的な「厳密な学問としての哲学」が諸科学に問題解決、問題提起のための新たな視点を作り出す可能性がある。そんな「厳密な学としての哲学」を構築するには、まず、現在で言うところの哲学を体系的に学びながらも、他の学問が扱う対象を考えることも重要だ。

参考文献・ウェブページ一覧

1)徳島大学総合科学部 公開セミナー 「人文知・社会知への誘い」 第9回 『哲学は何のため - 哲学へ招待-』

[shttp://www.tokushima-u.ac.jp/ias/docs/2017011000033/files/ga9.pdf](http://www.tokushima-u.ac.jp/ias/docs/2017011000033/files/ga9.pdf),2018/4/16 アクセス

2)石田三雄 徳島大学総合科学部 公開セミナー 「人文知・社会知への誘い」 第9回 『哲学は何のため - 哲学へ招待-』 2017/11/24 配布資料

今回は最初の授業で、主に哲学とは何か、大まかな哲学の歴史を学びました。私は高校生の時に倫理の授業を履修していなくて、哲学が何かということも、どんなことを勉強するのかも知らなかったのので、これからの授業でしっかりと学んでいきたいと考えています。

授業では、正しさは人それぞれなのではなく、普遍的なものだという考え方を学びました。もしそうならば、「みんなが同じことを正しいと認識する」ということなのかなと私は感じました。でも、世の中には、文明が発達していく中で、文化や宗教というものが成り立ってきました。これらは必ずしも1つではないので、今まで何度も文化や宗教の違いが原因で戦争が起こってきました。私は戦争や殺人は絶対にしてはいけないことだと思っているけれど、自分の信じている宗教や信念のためなら、人を殺してもいいと思っている人たちは今のこの時代でも世界中にたくさんいると思います。だから、そういう人たちと私がそれぞれ正しいと思っていることは違うのだと考えています。

考え方が違う人どうしがお互いに正論だけど、対立していることを主張しているとき、客観的にどういう風に考えたらいいのかを学びたいです。

コメント [y11]: がんばってください。

コメント [y12]: 正しいことを理解できなかったり、間違ったことを誤って正しいと思いきりこんだりすることはあります。「認識」と「事実・実在」はイコールではありません。

そもそも哲学とは、ギリシア語の愛と知恵とを組み合わせた言葉で、プラトンが最初に使った言葉である。また、哲学に対してよくある誤解が、「正しさは人それぞれだ」「個人の経験によってなんでも決まる」「目に見えるものが実在だ」などであるが、実際には逆で、正しさは普遍的であり、経験に先立つものがあり、また、実在は目に見えないのである。哲学者は多くの学問に触れており、哲学とはおよそすべての知識の領域のことを指している。そして、学(知)は、普遍を目指している。

哲学を学ぶためには、様々な学問について学び、なんでも人それぞれと考えるのではなく、普遍を目指さなければならない。

「個人の経験によってなんでも決まる」という言葉は、哲学に対するよくある誤解で正しいのは、「経験に先立つものがある」ということだ。つまり、経験できる準備があるということだ。例えば、人間は、言葉を使って他人へ教える。そもそも言葉を発するには、息を調節しなければいけない。これは、人間は何気なくできているがチンパンジーには不可能なことである。よって、人間を使って他人へ教えるという経験の前に、言葉を話すことができるという準備が整っている。

経験に先立つものがあることを知ると、どのような効果があると思いますか。

私は、経験をより貴重なものとして実感できる効果があると考えます。経験に先立つものは、必ずしも全ての人が持っているとは限らない。限られた人しかいないものだと知ると、一つ一つの経験はすごく貴重なもので、それを経験できる自分はあるがたいという気持ちになるのではないかと。

—授業のまとめ—

今回の授業では、哲学の語源、期限、歴史が主な内容だった。プラトン・アリストテレス・デカルト・ニュートンなど、哲学者の逸話を詳しく紹介していただいた。

—感想—

「哲学によくある誤解」での話に、私は大変驚いた。なぜなら、1「正しさは人それぞれだ」ではなく、「正しさは普遍的」2「個人の経験によってなんでも決まる」ではなく、「経験に先立つものがある」3「目に見えるものが実在だ」ではなく、「実在は目に見えない(感覚できない)」、この3つのすべて、私は誤解していたからだ。この授業を通して分かったことから、自分なりにこの3つの例えをそれぞれ挙げてみる。1は、赤信号。信号は青で進め、赤

コメント [y13]: この質問をする目的や、質問の意義について、説明してください。

コメント [y14]: 人間であれば(重篤な障害などが無い限り)すべての人が持っているはず。経験に先立つ部分が共通だからこそ、人は言語を学んだり理解しあったりできるのです。

コメント [y15]: 「感想」でなく、客観的な根拠や理由のある意見を述べるようにしましょう。

で止まれ。これは万国共通の認識であり、この規則を破ると罰則が与えられることもある。この規則を守っているからこそ、一定の秩序が保たれている。2は、魚と人間の呼吸の仕方である。魚はえら呼吸できるが、人間はいくら練習しても一生肺呼吸しかできないだろう。経験に先立つ生態は存在してしまうものだ。3は、空気や音、臭いなどではないだろうか。今回の授業は、理解できたことより理解出来なかったことのほうが多かった。それでも、哲学的な考えができるようになると、自分の見ている世界を違った方向から見ることができそうで大変面白そうなので、頑張って授業についていきたい。

コメント [y16]: 赤信号で止まるべきだというのは、単なる「規約上の正しさ」で、それが万国共通なのは、必然ではなく歴史の偶然です。

コメント [y17]: 結論から言うと違いますが、なぜそう考えたのか、理由を述べてください。

哲学とはギリシア語の「愛」と「知恵」を合わせた知識愛好という意味で、プラトンが最初に使った言葉である。また、自然科学は哲学から派生した言葉である。そのため自然科学における研究の問題意識や前提は、哲学に由来するものが多い。哲学の基本的な考え方とは、正しさは普遍的で、経験に先立つものがあり、実在は目に見えないものである。そして学は普遍を目指すため、アリストテレスやデカルトに代表される哲学者はといったおよそすべての知識の領域にふれた哲学者もいる。

私は世間に認められる哲学者は、一つの知識分野にだけ固執するのではなく、およそすべての領域に触れる必要があると考えた。私はこれまで哲学者は自分の個人的な主張について論じているのだと考えていたが、そうではなく普遍的で幅広く知識を集めた客観的な主張を論じているのである。主観的ではなく、説得力のある証拠と客観的な主張を持つから、現代に知れ渡る著名な哲学者はおよそすべての知識領域に触れていたのだと考えた。

今回の授業では、哲学とはそもそも何かについて学んだ。通常の「哲学史」はプラトン、アリストテレス、デカルトなどから、現代から見て「哲学」に見えるものをつなげて作ったものだ。しかし、実際の哲学というものはプラトン、アリストテレスなどの古代でも、デカルトなどの近世であっても、自然科学や心理学、幾何学など、おおよそ全ての領域の知識を愛好する学問であった。つまり、哲学というものはとても範囲が広がったのだ。哲学は愛(フィリア)と知恵(ソフィア)という言葉からでき、プラトンが初めて使った言葉である。日本においては西周が希哲学と訳したことから生まれた。哲学において、正しさとは普遍的なものである。なぜなら正しさとは理由や根拠に基づく理性的なもので、人それぞれ違うということはないからだ。また、人は経験する前に、その経験を可能にする装置(例えば声帯など)や時間、空間が絶対に必要なため、経験に先立つものがある。そして、法律のようにそれ自体の実在が目に見えない(感覚できない)ものがあり、目に見えるものが実在しているとは言えない。その感覚できない自然法則を、デカルトは神が作ったと表現した。こ

のような哲学に対する誤解があるので、その時代時代にあった学の全体像をとらえることが必要だ。以上が今回の授業の要点だ。

デカルトは「**実在が可視化できない法律など**は神が作ったと言った。私は高校のときの倫理の授業で先生から「人権ってあると思いますか。」と質問された。私は迷わず「あります。」と答えたが、先生は「それは人権があると教育によって思わされている。」と**おっしゃった**。もちろん、人権も目に見えないものなので、法律などと同じと考えれば、それは人類の発展の中で生まれ、学びや教育により一人一人に浸透していったもので、人の頭の中にあるので、目には見えないのではないだろうか。

コメント [y18]: デカルトは、自然法則とは、神が世界を創造するときに制定した、物体が従うべき法律のようなものだと考えた。

コメント [y19]: それで、結論としては、「人権は存在しない」ということだったのですか？

正しさは人それぞれでなく、普遍的で、個人の経験で決まるのではなく、経験に先立つものがあるのが哲学だ。哲学とは愛(フィリア)と知恵(ソフィア)が合わさったもので、プラトンが最初に使った言葉だ。哲学は英語で **philosophy** というが、実際には総合科学とでもいう。このことから、哲学と科学というように分けず、学の全体像をとらえることが必要となる。

正しさは人それぞれだと考える。国によって**法律**が違い、日本で禁止されていることでも、海外は許されていることがあるからだ。

コメント [y20]: 「法律」と「正しさ」はイコールではありません。

これに対する私の意見は、哲学でいう正しさとは、人の内面のように目に見えないことに対して、法律のように目に見えるものには対応しないのだ。

今回の授業の内容は、哲学とは何かということでした。

哲学とは何なのかということをお今まで深く考えたことがありませんでした。それまでは、プロ野球選手やプロサッカー選手などがテレビの特集で自分流の**哲学**みたいなどで聞いたことがある程度でした。しかし、正しさとは普遍的であると言われて、これは哲学とは呼ぶことができないなと思いました。

コメント [y21]: 哲学という言葉は「人生観」や「価値観」といった意味で使うのは、1970年代ごろに広がったようです。

そもそも普遍的とは、「すべてのものに共通しているさま」という意味です。ニュートンがリンゴが落ちたところから導き出した万有引力の法則は誰もが認める普遍的なものです。アスリートの自分流の哲学とは、ニュートンの万有引力の法則のように誰もが認めるようなものではありません。このように今まで誤解していた哲学について、もっと理解していけるように、その時代時代の学の全体像を捉えられていきたいです。

まず1つ目の要点は「哲学」とは愛(フィリア)と知恵(ソフィア)からなる言葉であり、19世紀までは自然科学という意味であったという事です。2つ目の要点は哲学史は現代から見て「哲学」に見えるものをつなげて作られているという事です。

今まで数学などと違い哲学の正しさは人それぞれだと思っていたので、今回の授業で正しさは普遍的なものだと初めて知りました。そして1つ疑問に思った事があります。なぜreasonを「理性」などとわかりにくく訳したのですか？

哲学は、歴史のように力が強い者が作り上げてきた学問だということ知った。
やはり、どの時代も弱肉強食の世界だと改めて痛感した。

また、philosophy が約100年前まで哲学ではなく、自然科学と訳されていたのは江戸時代の鎖国によって外来の文化がほとんど入ってこなかったことが原因の1つではないかと私は考える。

「哲学」という言葉はギリシア語の「愛(フィリア)」と「知恵(ソフィア)」が合わさった”Philosophy”という言葉で、日本の哲学者である西周が訳したものである。

哲学に対する誤解は様々で、例えば、「正しさは人それぞれだ」言われているが実際は「正しさは普遍」。「個人の経験によってなんでも決まる」ことはなく、「経験に先立つものがある」。「目に見えるものが実存」ではなく、「実存は目に見えない(もしくは感覚できない)」。

「学(=知)」は普遍を目指している。古代ギリシアの哲学者アリストテレスは自然学や形而上学、政治学、天文学など、多岐にわたった著書を執筆した。このようにおよそすべての知識を領域を持ったアリストテレスは現代につながる哲学用語の大部分を作った。

近世の哲学者を見ても、「我思ふ、ゆえに我あり」という言葉を残したデカルトもアリストテレスと同様に方法序説や宇宙論、幾何学など、やはりおよそすべての領域の知識を身につけていた。

Philosophy は、19世紀までは現代でいう「自然科学」という意味で用いられていた。Natural Science などといった言葉が使用される19世紀末まで、Philosophy は「理学」「物理学」と訳されていた。

通常の哲学史は、プラトンやアリストテレス、デカルトなどの著書の、現代から見て「哲学」に見えるものをつなげたもので、科学史も同様である。

「学(=知)の歴史」を理解するには、哲学と科学といった現代的な区分を前提とせず、その時代の学の全体像をとらえることが必要である。

コメント [y22]: 授業中にそのようなことを述べた覚えはないですが、どのようなことからそう受け取ったのでしょうか？

コメント [y23]: 事実として間違いです。江戸時代にも、自然科学関係の書籍の輸入は広く行われていました。また、フィロソフィーが「理学」と訳されたのは、その時代のフィロソフィーは、現代で言うところの「自然科学」とほぼ同じ意味だったからです。この点については授業で説明しました。

今回の授業の要点は、哲学は知を愛することであり、諸科学の源だったということだと考えました。

私は、今回の授業をうけて、知識は大切ではあるが、知識だけではなく経験がなければ解決できないこともあると考えました。

理由は、日本人である私が英語などの外国語を話せるようになるには、参考書による勉強だけではなく実際に会話をしてみるのが**ひつよう必要**だからです。

コメント [y24]: 授業のどういう部分からそのように考えたのでしょうか。

そもそも愛という意味のフィリアと知恵という意味のソフィアが合わさった哲学において、学は人それぞれだと誤解されがちだが、実は普遍的でありアリストテレスやデカルトのような哲学者のように、彼らはおよそ全ての領域の学問に携わっている。現代では哲学という意味である **philosophy** は 19 世紀末まで、自然科学という意味であり、**natural science** という言葉はそれ以降使われるようになった。したがって、学の歴史を理解するには哲学と科学といった現代的な区分を前提とせず、その時代時代の学の全体像を捉えることが必要である。しかし、私は学というのは普遍的ではなく人それぞれであり、個人の経験によってなんでも決まると思う。なぜなら高校の倫理の授業で、タレスは万物の根源は水、ヘラクレイトスは火、ピタゴラスは数と考えると習ったように人により考えは様々であり、**どれが正しいかと決めることは難しい**と思ったからである。

コメント [y25]: 数学の答えは人それぞれに決めてもよいでしょうか？物理学の法則は人それぞれに決めてよいでしょうか？

自然科学は哲学から派生したもので、自然科学における研究は哲学に由来するものが多い。

哲学=**Philosophy** はプラトンが最初に使った言葉でギリシア語の愛=フィリアと同じくギリシア語の知恵=ソフィアから成り立っている。

哲学はよく誤解を受けていて、正しさは人それぞれだとか個人の経験によってなんでも決まるなどと思われがちだが、実際は正しさは普遍的であり、経験に先立つものがある。

哲学は実にさまざまな分野の学問を含んでいる。

実際に古の哲学者アリストテレスはおよそすべての学問についての書物を書いた。

近世になってもそれは変わらず近世の哲学者デカルトは多くの書物を書き残した。

19 世紀末までは **Philosophy** は現代で言うところの自然科学という意味だった。

哲学史では昔の哲学者の書物の現代からみて哲学に見えるものをつなげてつくってある。

Philosophy は総合科学のようなものだった。

私はこの授業を受けて哲学についての歴史のことを知れてよかったと **思いました**。
その理由は、これまで哲学について触れる機会がなく、今回ではじめて知ることが非常に多かったからです。

「哲学者」アリストテレスの著作は自然学、形而上学、政治学、倫理学、動物学、天文学...というようにおよそすべての知識の領域をカバーしている。また、デカルトや「物理学者」ニュートンの著作も、およそすべての領域をカバーしている。これらの著作の、現代から見て「哲学」に見えるものをつなげて「哲学史」としている。したがって、哲学の「学(=知)の歴史」を理解するためには、現代的な区分を前提とせず、時代ごとの学の全体像をとらえる必要がある。

主観的すぎる意見や自分勝手な理論が間違っていることが自分で分かるように、幼い頃から哲学を授業に取り入れるべきだと **思った**。

哲学とは、ギリシャ語で愛(フィリア)と知恵(ソフィア)を合わせた言葉であり、知識を体系化していく学問である。正しさは人それぞれではなく普遍的なもの、何事も経験に先立つものであり、実在は目に見えないということを頭に置いて、物事を考えることが、哲学を学ぶ上で、重要なことだと思う。ただし、普遍的な正しさというのは、**誰もが共通して理解できるということ**であり、絶対的なもの、ひとつしかないものという意味ではない。なぜなら、考え方や価値観は、ひとそれぞれであり、一概に同じと言えないからである。つまり、哲学を学ぶということは、誰もが納得できる考え方で、物事の本質を捉えるということであり、その積み重ねが今ある様々な問題の解決につながるのではないかと **思う**。

コメント [y26]: 人間の「理解」の方は誤ります。たとえば、「 $1+1=3$ だ」と誤解している人がいるかもしれませんが、それはその人の理解が誤ったということであって、「その人にとっては $1+1=3$ だ」などということにはなりません。

[授業のまとめ]

1 哲学では

- ・正しさは普遍的である。
- ・経験に先立つものがある。
- ・実在は目には見えない(感覚できない)。

2 **Philosophy**(=哲学)という言葉を最初に使ったのはプラトンであり、その後登場する有名な哲学者としてはアリストテレス、デカルトが挙げられるが、著作物は自然学・倫理学などおよそ全ての知識の領域を網羅しており、哲学は諸科学の起源といえる。

[意見]

哲学は古い歴史を持っており様々な学問の起源となるものであるため、過去の数々の発明から私たちの心理現象まで人間の生活とは離して考えることのできない学問だと考える。

西洋哲学は自然科学の前提 (←祖先) であり、ほかにも多岐にわたる学問の派生元である。哲学は英語で **Philosophy** と云うが、これは二つに分割でき、ギリシア語で「愛」という意味のフィリアと「知恵」という意味のソフィアに分けられる。つまり、「知恵」を「愛」する学問である。それゆえ多様な学問の前提として位置付けられる。知といっても、決して雑学のようなものでなく、学問的なものであった。例えばかの有名な哲学者アリストテレスの著作には、自然学・形而上学・心理学・天文学等があり、ほぼすべての学問領域を網羅していた。近世の哲学者では、「我思う、ゆえに我あり」のデカルトや「人間は考える葦である」のパスカルらが有名である。

現在では **Philosophy** という単語の意味は「哲学」だが、19世紀末までは「自然科学」といった意味だった。これは欧米でも同様であり、「哲学」という言葉がまだ生まれて間もないことがわかる。

私は個人的に哲学に興味を持っており、プラトン・アリストテレス・デカルトといった人名は頻繁に目にするのですが、ほかのマイナーな哲学者のことも少しでもいいので知ってみたいと思っています。またの機会に紹介していただけたら幸いです。

コメント [y27]: 授業だけでなく、自分でいろいろな本を読んでもよいです。

私は高校で倫理を学んでいたため、大体のことは知っていたが、倫理に出てくる難しい単語を英語にするとこんなに分かりやすいとは知らなかった。悟性が **understand** だと知るととても理解出来た。私が持っていた倫理の単語集には「感性に与えられた多様な**直感直観**的印象に思考の枠組みを当てはめて一定の対象を構成する能力」、と書いてあったが、抽象的すぎてこの時はよく分からなかった。英語にすると簡単だと今回で学んだので、これからこの授業で難しい言葉が出たら英語で調べてみようと考えた。

そもそも哲学とは自然科学に通ずるものがあって、「哲学者」と呼ばれた者達が著作してきた自然学、形而上学、政治学、倫理学、天文学・・・などの学問を総称するものであったという。つまりは世界中にあるさまざまな学問と哲学をイコールで結ぶことができるようなのだ(「総合科学」=「哲学」)。すべての学問の領域を知り尽くしていた「哲学者」は

やはり、「知識愛好家」(philosopier)だったのだ。

これまで「哲学」そのものが「自然科学」やら「理学」やら「物理学」やら「総合科学」やらと言われてきたのも、すべて「学問」であって、「知識」を「愛する」ことが前提としてあるという面と同じだったのだ。学問に対して愛がなければ、はなから哲学者はそれらを調べようとは思わない。

「学問」は、ある「問題」が立ち上がった時にその「答え」なるものを探した時に初めて成り立つ。「問題」に対して「答え」を探すことが「学問」であるからだ。であれば、いま世界中に様々な学問が存在しているのも、ある「問題」を誰かが見つけ、調べ、考え、答えを探してきたからだ。西洋人は一体どのような過程で「問題」を見つけてきたのだろうか。そんな疑問を持つこともまた、「哲学」になる。

コメント [y28]: 総合科学入門講座で言いましたが、学問における関心とは、その学問体系自体が問うものです。

哲学とは、愛と知恵だ。正しさは普遍的で、経験に先立つものがあり、実在は感覚できない。アリストテレスの師はプラトンで、プラトンの師はソクラテスである。現代につながる哲学用語の大部分を作ったのはアリストテレスだ。12世紀のアリストテレスも17世紀のデカルトも哲学はおよそすべての領域。19世紀末まで philosophy は現代でいうところの自然科学という意味だった。よって、「知の歴史」を理解するために現代的な区分を前提とせず、時代の全体像をとらえる必要がある。

自然科学はいつ哲学から派生したのですか。1829年だと思えます。なぜなら西周が哲学という言葉を作ったからです。

コメント [y29]: 西周の生まれた年。

コメント [y30]: 日本という、当時はとてもローカルな弱小国で起こったことです。

哲学において、正しさは普遍的であり、経験に先立つものがあり、実在は目に見えない見えないものである。哲学「Philosophy」はギリシャ語の「愛(フィリア)+知恵(ソフィア)」が語源となっており、ソクラテスの弟子プラトンが最初に使った言葉。哲学という語訳は日本人の知識人、西周によるもの。Philosophy は現代でいうところの「自然科学」という意味であるが、「総合科学」とでもいうようなものでもあり、そこから諸科学が派生していった。「学(=知)の歴史」を理解するためには、哲学と科学といった現代的な区分を前提とせず、その時代時代の学の全体像をとらえることが必要である。

今回の授業ではまず、哲学とは何かについて学んだ。哲学(philosophy)とはギリシア語の「愛(フィリア)」と「知恵(ソフィア)」を組み合わせた言葉であり、プラトンが最初に使用

した。また、「哲学」と訳したのは西周である。次に、哲学は普遍を目指すということを学んだ。アリストテレスやデカルト、ニュートンの著書を見ると、哲学とはおよそすべての知識の領域であると分かる。「哲学史」とは、「科学史」と同様に現代から見て「哲学」に見えるものを繋げて作ったものである。

私は今回の授業で初めて、哲学とはどういうものかについて学んだ。まだまだ分からないことが多くどういう意見を出したらよいか分からない。これからの授業で哲学についての知識を深め疑問を持っていけるようにしたい。

1,授業のまとめ

哲学とは

philosophy(ギリシア語)=愛(フィリア)+知恵(ソフィア)

プラトンが最初に使い、西周が哲学と訳した

哲学について

アリストテレスやデカルトなどの哲学者は、およそすべての知識の領域に精通していた。学(=知)は普遍を目指すべきものであった。

哲学史

19世紀まで philosophy は現代の自然科学という意味だった。

現在の哲学史とは、アリストテレスやプラトン、デカルトの著作の内、現代から見て哲学に見えるものをつなげている(科学史も同様)。

philosophy ⇨ 総合科学であった

2,意見・質問

一つひとつの知識領域を追究するためには、およそすべての知識に精通しておく必要がある

3,根拠

アリストテレスやプラトン、デカルト、ラッセルも哲学が有名だが、彼らは哲学だけを研究していたのではなく、物理学や数学、天文学などあらゆる学問に \forall を研究し精通していた。それだけで成り立つ学問はなく、ほかの学問と関連している。また、ほかの知識と結び付け、体系化することで彼らは知識を深めていった。さらに、多くの知識を得ることでさらに興味関心を深めた。

まずはこの講義で聞いたことを要約する。

哲学は難しいと感じる人が多い。高校の倫理では難しい用語がたくさん使われている。

しかし、理性は英語で「reason」であり、理由をつけて考えることとされている。またカントの悟性は「understanding」である。哲学という言葉もギリシア語の「愛」と「知恵」を足した「philosophy」である。日本語では難しい倫理や哲学の用語も英語にすることで意味をわかりやすく理解できる。

他にも色々なことを聞いたが、上記の事を聞く中で疑問が浮かんだ。日本の哲学で使われる用語は難しく翻訳されているように感じた。それはなぜなのか疑問に思う。西周が翻訳した「哲学」は当時、「愛」が仏教であり良い意味ではないため哲学と訳したという事を聞いた。これだけではなく、他の用語も難しく感じる事が多い。他の難しい用語も仏教や宗教が絡んで難しい言葉になってしまったのだろうかと考えられるが疑問に思ったために質問させていただき事にした。

コメント [y31]: まずは自分で調べてみよう。

自分は哲学とは思想やイデオロギーだと思っていたが、実際にはギリシア語で愛を表すフィリアと知恵を表すソフィアが組み合わさったものであるということを知った。哲学に対する誤解として「『正しさは人それぞれだ』』」というのがあり、自分もその通りであると思っていたが、正しさとは普遍的なものであり、経験に先立つものであると分かった。現代に繋がる哲学用語の大部分を作ったのはアリストテレスであり、その他「哲学」という言葉を初めて使ったプラトンやソクラテス、また近世で言えば「われ思う、ゆえにわれあり」で有名なデカルトが今日の哲学の礎を作ってきたが、19世紀末までの世界では philosophy は現代で言う自然科学という意味であり、江戸時代の蘭学者や英学者たちは philosophy を「理学」や「物理学」などと翻訳していた。science という言葉が定着するのは日本で言えば明治時代になってからである。

しかし実際には、philosophy は「総合科学」とでも言うようなものであり、そこから諸科学が派生してきたと考えられている。また、我々は「学=知の歴史」を理解するために、哲学と科学といった現代的な区分を前提とせず、各時代の全体像を捉えるようにしていく必要がある。

哲学とは Philosophy 「愛+知恵」 現代でいう「自然科学」
哲学では

- ・正しさは普遍的。
- ・経験に先立つもの。
- ・実在は目に見えず、感覚できない。

理性=reason(理由をつけて考える)

悟性=understanding(理解する)

実在は目に見えないし、感覚できないものということは、我々が普段使っている、「」実際に存在するという意味の「実在」と哲学の「実在」は別物なのか?

今回の授業では、主に哲学とは何なのか、哲学の基礎を中心としたものでした。

授業を聞いて、疑問に思ったことが一つあります。それは哲学に対する誤解がよくあるということです。どうして哲学に対してよく誤解が起こるのでしょうか?私は人々が哲学というものを詳しく知らないからだと考えます。授業で取り上げられていた例で「正しさは人それぞれだ」「個人の経験によってなんでも決まる」「目に見えるものが実在だ」とありました。これらの意見は授業でもあった通りちがうと考えます。その根拠として実際に哲学という言葉の意味を調べてみると、「人生・世界、事物の根源のあり方・原理を、理性によって求めようとする学問。また、**経験から作り上げた人生観**」とありました。哲学の意味をここまで理解している人はほとんどいないと考えられます。以上のことより、私は人々が哲学についてよく誤解するのは哲学のことを詳しく理解していないからだと考えます。

コメント [y32]: こうした意味での使用は、1970年代ごろに広がったそうです。

今回の授業では、哲学は現代の諸科学の根源であり、総合科学の様なものであったと学びました。哲学にはずっと興味はあったのですが、高校の倫理で少し触った程度なので、大学ではもっと深く学びたいと思います。

○授業の要点

- ・哲学は様々な物事関連している
- ・通常の「哲学史」、「科学史」はプラトン、アリストテレス、デカルトなど哲学者らの著作の現代から見て「哲学」に見えるものをつなげて作られている
- ・Philosophy(哲学)といっても時代によって捉えられ方や意味の解釈が違う
- ・「学(=知)の歴史」を理解するには、哲学と科学といった現代的な区分を前提とせず、その時代時代の学の全体像をとらえることが必要

○コメント

私は、哲学とまでは言わないが「考える」という行為は人にとって必要だと考える。理性を持ち、物事について考え、悩むことができるのは人間の特徴だからだ。何知識の体系を身につけ知恵ある者に近づくためにも自分の興味・関心があるものについて学習、調査、

考察することが重要である。そうすることで「知る喜び」を知り、人として生きていくうえでの1つの幸福を得ることができるのではないかと授業を通じて私は考えた。

・授業の目的

1 西洋哲学の基本概念を取り上げ、哲学がどのような問題意識から、どのような問題を扱ってきたのかを考える。

2 **倫理的論理的**な文章を書く能力の獲得。

・「哲学とは」

1 **philosophy**:ギリシア語で「愛と知識」

(ギリシアの哲学者プラトンが最初に使った言葉)

(「哲学」と訳したのは江戸時代後期から明治時代初期の日本の哲学者 西周)

2 正しさは普遍である。

3 経験に先立つものがある。

4 実在は目には見えない(感覚できない)

・「学=知」は普遍

古代ギリシアの哲学者 アリストテレス 「万学の祖」

およそすべての知識を網羅。

(アリストテレスの諸著作は12世紀以降、アラビア経由で西ヨーロッパに伝えられ、諸学の基礎となった。現代につながる哲学用語の大部分を作った。)

・近世の哲学

フランスの哲学者 デカルト 「近代哲学の祖」 「合理主義哲学の祖」

「われ思う、ゆえにわれあり」

(やはり、およそすべての知識を網羅)

・19世紀末まで

philosophy=自然科学

・「哲学史」

プラトン、アリストテレス、デカルトなどの著作の現代から見て哲学に見えるものをつなげている。

(「学=知」の歴史を理解するためには、哲学と科学といった現代的な区分を前提とせず、その時代時代の学の全体像をとらえることが必要である)

私は哲学とはあくまで思想的なものばかりだと考えていたが、今は元々の哲学とは「知識」や「物事のとらえ方」などを「探求」するものであるがゆえに**人の数だけ意味やとらえ方が変わってくる**と考える。その根拠として、デカルトやアリストテレスなどの哲学者と言われる人々はほぼすべての学問を研究し、多面的に物事を判断**して**いることである。

コメント [y33]: この下で書いてある「理由」を見ると、むしろ「哲学は普遍的」ということになります。たとえば、「人それぞれの物理学がある」なんていうことはないでしょう。

例えばアリストテレスは自然学、政治学、心理学、動物心理学、天文学など多種にわたる知識をもっていた。そして、上にも上げていたように「哲学史」はあくまで現代から見て哲学と見えるものをつなげているにすぎないことに加えて「哲学」という言葉は元々自然科学を表す言葉であったということも根拠の一つである。

今回の授業では哲学とは何かを教わりました。哲学は主に西洋で発達したものであり、日本人がそれらの単語を一つ一つ難解な漢字にしてしまって複雑化してしまったために哲学の意味を時を経るにつれて違った解釈にしていることや、「実在」とは目に見えないということを教わりました。実在が目に見えないというのが未だによく理解ができなかったのどのような意味なのか自分で考えてみました。自分の予想は、いまそこにあるものは、いろんな条件が揃ったために今ここにあるので本当の姿とはまた本質の違う別の何かとして存在しているためにそのものの本当の存在は感覚できないのかなと考えました。

コメント [y34]: 考えるとは、「頭の中から何か取り出すこと」ではなく、調べ、知ることから始まります。

哲学は多種多様な学問から成り、一般的に認知されているような普遍的では無い答えを追い求めたり経験によって決まるような学問ではないというのが授業の要点であったと考えます。

哲学には明確な答えはないと考えますが、普遍的な知識を得ている過程でそれは現れるのでしょうか。

コメント [y35]: ありますよ。哲学書を読んでみれば、それらが問いを立てて答えを出していることは明らかです。

どうしても漠然とした知識に答えを与えるのがこの学問という意識が拭えないため、この質問をさせていただきます。

コメント [y36]: なぜですか？

この授業の要点は、目に見えるものではなくて、目に見えないものが実在だということである。私は、実在は目に見えないものと考えてる。ネオ仏法のススメに、「コップの設計図があれば、コップが壊れたとしても、何度でも同じものが作れます。そういう意味で、現実のコップよりも、コップの設計図のほうが“実在性が高い”と言えるでしょう。」「設計図がこの世からなくなっても、アイデアが残っていればもう一度、設計図を作ることができる。したがって、設計図よりもアイデアの方が実在性が高い。アイデアは目に見えない価値である。ゆえに、目に見えない価値のほうが実在性が高い。」とある。(4/16、ネオ仏法のススメ、<http://www.philosophic-spiritual-master.com/>目に見えないもののほうが実在であることを哲学的に証明する)よって、実在は目に見えないものと考えてる。

コメント [y37]: 「実在」とは何か、ということについて、これから授業でも取りあげます。

哲学とは、愛(フィリア)+知恵(ソフィア)、つまり知恵が好きという意味である。全ての情報は感覚から始まる。そして、その感覚を研究することで知識となり、理解し、またそこから推論をする。そしてその推論を研究し、またそれが知識となりの繰り返しである。

なぜ人は、正解のないことに対して頭を使って考えるのでしょうか。高校の倫理の授業の時に、タレスは万物の根源は水といい、ピタゴラスは万物の根源は数といったりなど、**万物の根源**は何かなど、分かるはずもないのについて思っていました。とは言いながら自分は、答えのないお題で討論したり友達と話し合ったりするのが割と楽しいと感じます。だから、哲学者たちも、正解のないことに対して考えることを楽しんでいたのではないかと**思います**。

コメント [y38]: 現代では物理学者たちが「万物の根源」としての素粒子やビッグバンについて考えています。それも、「分かるはずがない」ことでしょうか？

今回の授業では、哲学という言葉が具体的に何を指すのかを学んだ。哲学とえば、「一見当たり前のように思われている事実に関して問いを投げかける」学問であるように私は認識していたが、それは正しくなかった。前述のような問いは研究されることはあるが、それだけを指して哲学と呼ぶのではない。哲学とは本来、現代でいうところの科学などを含んだ意味合いを持つ言葉である。実際に、十九世紀末まではそれらは同一の単語で言い表されていた。その呼称や区分は変化しているものの、人間は**学問を通して絶えず問い**を持ち続けてきた。現代で哲学と呼ばれる学問のように、確かな答えのないものに対しても同様である。**どれだけ考えても答えが出ないことについて考え続ける**のは、その思考こそが自らの存在の証明であるからだ。自分自身の存在は不確かなものであるが、こうして考えている何かが存在することは明らかである。教科書に名を連ねる先人たちも、科学にせよ哲学にせよ何らかの問いを掲げそれに向かい合うことで、自らの存在を確かめてきたのではないだろうか。現代に生きる私たちは、先人たちに学んだ上で自らの考えを持ち、新たに「問い」を投げかけていく必要がある。

コメント [y39]: 総合科学入門講座で言いましたが、学問における関心とは、その学問体系自体が問うものです。

コメント [y40]: 哲学はそういうものではありません。哲学書をどれか一つでも読んでみれば、問いが立てられ、それに対する答えが与えられています。

「哲学(philosophy)」とは、ギリシア語の「愛(フィリア)+知恵(ソフィア)」が組み合わさった言葉で、プラトン(BC470～399)が最初に使い始めた。哲学において、正しさは普遍的で経験に先立つものがあり、実在は目に見えない。哲学者であるアリストテレスやデカルトは、心理学など、およそすべての知識の領域を著作しており、通常の「哲学史」は、現代から見て「哲学」に見えるものを繋げて作ってある。「科学史」も同様である。実際には、

philosophy は「総合科学」とでもいうようなものであり、そこから諸科学が派生してきた。私は、講義の中でも話があったように、「正しさは人それぞれだ」「個人の経験によってなんでも決まる」「目に見えるものが実在だ」というように考えていたが、それらは誤解だということに気づき、正しい考え方に納得した。

今回の授業では、哲学は知恵の愛好と訳すことができ様々な諸科学を派生した言わば総合科学であると学んだ。アリストテレスの著書「自然学、形而上学、政治学、倫理学、心理学、動物学、天文学など」、デカルトの著書「方法序説、省察、宇宙論、人間論、屈折光学、幾何学、心理学など」が扱っていたおおよそすべての領域の知識が哲学として位置づけられており、実際現代までは哲学と科学は区分されるものではなかった。

また哲学に対するよくある誤解についても説明を受けた。まず正しさは人それぞれではなく普遍的なものである。次に経験にはそれに先立つデバイスが存在し、経験がすべてを決めるわけではない。そして実在は自然法則や神といった感覚できないものであること。

授業の中で神という言葉が出てきたが、私の家庭は宗教に対してあまり頓着がなく神を身近に感じていなかった。高校の倫理の授業では目に見えない神の存在を前提とした考えをいくつか学んだが、いまだに学問で扱われる神についての認識があいまいだ。先生は学問でいうところの神をどのように解釈しているのでしょうか。知の快樂というサイトによると「私は神の名のもとに、無限性や必然性、絶対性であるといった観念を抱くが、それらの観念は私自身の中にはもともと存在しないものである。(中略)これらの観念は神によって私にもたらされたものだとするほかはない。(知恵の快樂「デカルトにおける神の存在証明」による)とあるので、私は神は人と切り離されながらも人に大きな影響を与える存在だと考える。

コメント [y41]: 授業で取り上げます。

今回の講義の中で「哲学」が時代に合わせて様々な解釈が行われてきたことがわかった。その中で私は、なぜニュートンは自分の学問分野を「哲学」と表現したのか疑問に思った。私から見れば、ニュートンは物理学者以外考えられないので、不思議に感じた。私は、ニュートンは自分の学問は「哲学」つまり知恵の学問の一部と捉えたのではないかと考えた。

コメント [y42]: 授業ではそのようなことは述べていません。哲学という言葉は、19世紀末まで、現代で言えば「自然科学」に相当するようなものだったと言いました。

授業の要点としては、哲学の説明である。哲学は授業によると、ギリシア語の「愛(フィリア)+知恵(ソフィア)」である、「Philosophy」が由来である。現代でいう「自然科学」は、

哲学から派生したものであり、自然科学における研究は哲学に由来したものが多く、そして、哲学の正しさは普遍的で、経験に先立つものがある。と、いうことであった。

哲学を調べてみると、

物事を根本原理から統一的に把握・理解しようとする学問。古代ギリシアでは学問一般を意味し、近代における諸科学の分化・独立によって、新カント派・論理実証主義・現象学など諸科学の基礎づけを旨とする学問、生の哲学・実存主義など世界・人生の根本原理を追求する学問となる。認識論・倫理学・存在論・美学などを部門として含む。

デジタル版 広辞苑 第六版 岩波書店 (一部抜粋)

と、書かれている。また、哲学から派生した自然科学を調べると、

自然界に生ずる諸現象を取り扱い、その法則性を明らかにする学問。ふつう天文学・物理学・化学・地学・生物学などの分野に分ける。

デジタル版 広辞苑 第六版 岩波書店 (一部抜粋)

と書かれている。天文学や化学がある自然科学は、名前を聞くと何となくでもわかるが、哲学と聞いてもパッととはわからない。哲学のことを「Wikipedia」で見ると、

哲学以外の学問の場合は、一般に、名前を聞いただけでもおおよその内容は察しがつく。ところが哲学の場合は、名前を聞いただけではそれが何を研究する学問なのか内容を理解できない。これは哲学という学問の対象が決して一定していないことを示しており、哲学はまさにその定義のとおり「知を愛する学」とでもいうほかに仕方ないような特徴を備えている。

「哲学」 - Wikipedia <https://ja.m.wikipedia.org> (一部抜粋)

とある。近世までの哲学者、アリストテレスやデカルトなどが多くの領域の著書を出していることもわかる。そして、「哲学思想の基礎」で学ぶ西洋哲学については、「Wikipedia」を見ると、東洋哲学と比較されている。そこには、

西洋哲学と東洋哲学を比較した場合、西洋は「学」としての哲学、東洋は「教」としての哲学という見方ができる。すなわち西洋哲学は、学問として論理的観点に立ち、世界の本質の理論的解明を目指している。一方東洋哲学は、釈迦にせよ孔子にせよ、「いかに生きるか」という人生に対する実践的関心が思索を方向づけている。

と書かれている。また、「実在」の捉え方の違いもあり、

西洋哲学の真実在は自然の外部、自然を超越した場所に求められる。一方東洋哲学では、真実在は個々人の内奥に求められる。

「西洋哲学」 - Wikipedia <https://ja.m.wikipedia.org>

より一部抜粋(実在のところは文章を一部改編したのち掲載)。

と書かれている。「哲学思想の基礎」の4月13日講義で配られたプリントの、哲学に対するよくある誤解の部分で、実在は目に見えない(感覚できない)と書いてあったが、西洋と東洋の2つの哲学の実在の在り方には、目に見えないものであり且つ違いがあることがわかる。

コメント [y43]: 何がわからなくて、何を知りたくて調べたのでしょうか？

今回の講義で、私が特に重要だと感じたのは、歴史的な観点で哲学をみるという点だ。私は今まで、哲学というと「人間とはなにか」や、有名なものだと「水槽の中の脳」などに代表される、**答えがない議論**のようなイメージを抱いていた。しかし、講義でお話しされた内容の中に、「自然科学は哲学から派生したもの」という言葉があり、私の中にあつた哲学に対するイメージが大きく変わった。

今まで我々が絶対的と信じてきた自然法則は**数学的な式などによる存在の証明**はあつても、だれもその実在を確認したというものはない。普段の生活の中で確実に法則があるのにも関わらず、誰が定めた法則であり、どこに実在しているかを万人が納得できるよう説明ができる人はいない。

私たちの世界を創造した神がいるという**過程仮定**を立てれば、法則を定めたのは神ということにすればつじつまは合うが、その場合、どこに存在しているかというのは神のみが知っていることで、その神から想像された私たち人間は法則がどこに存在しているのかわからないまま神が定めた自然法則にただ従って生きていることになる。

現代に生きる私たちは、過去に生きた我々の祖先の遺産の上に成り立つ科学技術を発達させてきた。ニュートンのリンゴは有名な話だが、リンゴが落ちる瞬間からニュートン自身が万有引力という自然科学の法則を作るまで**一連の流れ**はその本人しかわからないもので、私たちは結局のところ万有引力という法則があるのは知っていてもなぜその法則があるのか、なぜその法則は実在するのかという本質的な部分を知らずにいる。**私の考え**としては「神は存在せず、現代の自然法則、及びすべてのこの世の中で当たり前のように思われているものは**我々の祖先**が作り出したもので、私たちは知らず知らずのうちにその法則に従って生きているだけである」というものだ。仮に神が世界を創造した際、万有引力という法則を作ったとすれば、その**想像創造**された世界に生きる私たちは「神によりその法則を知らされているのではないかと**思う**のだ。その法則に従って生きなければならないのだから、その法則を知らなければ私たちは神の法則に従わずに生きてしまう可能性もあるからだ。

歴史的な観点で哲学をみると、今まで私たちが疑いもしなかったものも本当に正しいことなのかという疑問が多数生まれてくる。今回は**自然科学という点から「神は存在しない」**という考えを述べたが、現実としてなにが正しいのかは誰にもわからない。これから人生を生きていくにあたり、この世はとても不確かな構成で成り立っているということを念頭におき、自分自身の考えをしっかりと持った人間となれるよう、より一層の努力を行っていきたくと考えている。

コメント [y44]: それぞれ、「答え」はありますよ。たとえばアリストテレスは「人間」にいくつかの定義を与えています。パトナムは「水槽の中の脳」の思考実験で、パルクリ的な世界観に現代的な装いを与えたのです。

コメント [y45]: 実験によるデータを、数学によって整理するのです。

コメント [y46]: 本人が何を考えたのかということと、法則の証明のプロセスは別です。後者は誰しもアクセス可能で普遍的です。

コメント [y47]: あなたの祖先は世界を創造したのですか？

コメント [y48]: 歴史的には、むしろ自然科学は神を前提として成立しました。

講義を通して、哲学は「哲学」という区分があるのではなく、自然学や倫理学なども含めた総合的な分野であることが分かりました。そのことから哲学と総合科学部での学びには共通点が多いのではないかと考えました。哲学は神などといった実在は目にすることが出来ず、自分自身ではどうすることもできないものとのつながりが深い学問だと考えました。高校での暗記中心の倫理の授業とは違って、哲学からその時代の全体像を捉えられる力を身につけたいと思います。

哲学という分野では、正しさは普遍的なものであり、経験に先立つものがあり、実在は感覚できないものもあるということを学びました。(例えば、万有引力の法則は目に見えないが実在するものである。)

哲学者、アリストテレスは、クジラは魚じゃなく哺乳類だと分かっていたと先生はおっしゃっていましたが、なぜそれをアリストテレスは分かっていたのですか。彼が海についての知識をなぜ知る必要があったのか疑問に思い質問しました。

コメント [y49]: それは知りたかったからでしょう。クジラを観察すれば、魚類でなく哺乳類の特徴がある、とアリストテレスは気付いた。

今回の講義を通して哲学における正しさは普遍的であり人それぞれなどではないと分かった。また、哲学はおよそすべての領域に通じていることがわかった。

〔質問〕 哲学は人生においてどのように役立ちますか。

【自分なりの解答】

自分の生き方が正しいものかどうか判断する基準になる。

「理由」

世界を発展させてきた偉人たちの考えを哲学から学ぶことでこれからの世界のために自分がどのような考えを持つべきか学ぶことができるため。

コメント [y50]: なぜこれを質問するのか、授業との関連で理由を書くようにしましょう。

哲学とは、語源的には学問的な知識(知恵)が好きという意味。正しさは普遍であり、実在は感覚で捉えることができない。法則も神の頭の中にある。哲学≒総合科学部であり哲学はとても広い。

どうして「哲学」は無くならなかったのだろうか。

哲学は元々総合科学といった幅広いもので、様々な学問が哲学から派生していき残りが現在の哲学になったということだった。哲学の中から1つ1つの学問が出来ていったな

ら最終的に哲学は「哲学」という様々な学問の総称等になるのではないだろうか。しかし、哲学は1つの学問として残っている。このことを疑問に思った。また哲学と他の学問に明確な違いはあるのだろうか。あるとしたらその区切りはどこなのだろうか。昔から私の中で哲学は曖昧でフワッとしたもので、この不透明感が哲学を更に難しく感じる原因でもあったから、これを機にきちんと知りたい。

コメント [y51]: なぜそうなるのですか？

コメント [y52]: 「哲学と他の学問の違い」と言われても、例えば物理学と生物学の間にも明確な違いがあります。つまり、「他の学問」も様々なので、一概には言えません。

今回の講義では哲学とは何かというのが取り上げられていた。哲学とはプラトンが最初に使った言葉フィリア、ソフィアが語源であり、哲学は「正しさはそれぞれだ」、「個人の経験によってなんでも決まる」、「目に見えるものが実在だ」などと誤解されているが、実は正しさは普遍的で経験に先立つものがあり実在は目に見えないものであるということ学んだ。また哲学は幅広く科学や物理学なども含まれていることを学んだ。哲学とはどのようなものなのか、これからの講義でさらに理解できるようにしたい。

アリストテレスであれ、近世の哲学者デカルトであれ、およそすべての知識の領域の本を書いている。なぜ二人とも一つの学問に集中して学びを深めるのではなく、およそすべての領域にまで足を踏み入れたのが疑問である。このことに関して、私は彼らはすべての領域の学問を学ぶことでより自分自身が納得する答えを導きだそうとしたからだと考える。理由は、すべての知識はつながっているからである。また、彼らは一つや二つの学問からだけでは解決できないほど深い領域のことにまで追及していたからであると予想する。

コメント [y53]: 現代の視点から見ると「多様な領域」と見えますが、その時代にはすべて「哲学」の範囲内だったということですね。

今回の授業では哲学は誤解されることがあるが、実は正しさは人それぞれではなく普遍的で、経験に先立つものがあり、実在は目に見えず、感覚できないということ学んだ。また「学(=知)の歴史」を理解するためには、その時代時代の学の全体像をとらえることが必要だと教わった。

疑問なのだが、なぜ哲学において正しさは人それぞれだと誤解されるのだろうか。私の意見はこうである。

まず哲学という言葉について、コトバンクの中のデジタル大辞泉の解説によると、「各人の経験に基づく人生観や世界観。また、物事を統一的に把握する理念。」とある(コトバンク「哲学(てつがく)とは-コトバンク」<https://kotobank.jp/word/哲学-101028,2018,4,16> アクセス)つまり、人それぞれ違うのは個人の経験に基づく人生観や世界観なのであって、正しさではない。正しさは普遍的なのであって、人それぞれなのは各個人の世界観なのである。

よって、正しさは人それぞれだと誤解する原因は、人それぞれなのは各個人の世界観で

コメント [y54]: こういう用法は1970年代ごろに広まったそうです。

あって、正しさそのものは普遍的だということを理解していないことにあると私は考える。

この授業での要点をわたしなりにまとめてみる。そもそも「哲学」とは、ギリシャ語で「愛」という意味の「フィリア」と「知恵」という意味の「ソフィア」という言葉が合わさったものである。また、最初にこの言葉を使ったのはプラトンである。哲学にはたくさん誤解がある。例えば、目に見えるものが実存だと思われがちだが、実存は目に見えない(感覚できない)と定義されている。著名な哲学者としてよく名前が上がるアリストテレスは様々な分野における専門学者であり、おおよそ全ての領域の知識を持っていた。近代の哲学者として有名なデカルトもまた、おおよそ全ての領域の知識を持っていたと言われている。現在の哲学史は、現代から見て「哲学」に見えるものをつなげて作ってある。実際には、**Philosophy** は「総合科学」というようなものであり、そこから諸科学が派生してきた。哲学を学ぶ上では、哲学と科学といった現代的な区分を前提とせず、その時代時代の学びの全体像を捉えることが必要である。

私は今回の講義で、哲学の本来の意味、由来を知ることができた**気がする**。高校でも興味があったので倫理の授業を選択していたが、ただ単に用語を覚えるだけで「哲学」の意味はよくわかっていなかったように**思う**。しかし今回、哲学を学ぶことで視野が広がるのではないかと**感じた**。例えば、アリストテレスの研究対象は自然学、形而上学、政治学、倫理学、心理学、動物学、天文学.....など多岐にわたる。そして、「万学の祖」とも呼ばれるようになり、「論理学」があらゆる成果を手に入れるための「道具」であることを前提とした上で、様々な学問を分類した。そこで私は何事も他のことと関連づけで学んでいく姿勢が大事だと**思った**。アリストテレスの考えからすると、全ての物事を論理的に考えることで学びに繋がり、自分の知識が増えていく。アリストテレスの祖、プラトンが対話によって真実を追求していく問答法を哲学の唯一の方法論としたが、アリストテレスは経験的事象を元に演繹的に真実を導き出す分析論を重視した。このように何事も興味を持ち経験し、知識を体系化していくことが大切になるのだと私は**思う**。

哲学(**Philosophy**)とはギリシア語の愛と知恵という言葉が合わさったものである。プラトンが最初に文献内で使用した。

哲学の **Philosophy** という言葉を直訳すると「知識愛好」となる。

ここで言われている知識とはどのようなものなのか。

アリストテレスは自然学をはじめとする学問の本があり、知識とはおおよそ全ての知識の領域だったことがわかる。

近世の哲学者であったデカルトの著書も多くの学問の本を記している。

近世の知識もまた全ての知識の領域であった。

以上の点から **Philosophy** とは総合科学というようなものであった。

日本における哲学の変遷について知りたいと考えているので今後の授業にそのような視点も取り入れていただきたい。

今回の授業では、「philosophy」という言葉は「愛」と「知恵」から来ており、明治時代に「哲学」と訳され、19世紀まで「自然科学」という意味で使われていたということを学んだ。私が疑問に思ったことは、科学的な意味も現在の哲学の意味もあったにもかかわらず、なぜ分けて考えられるようになったのかということである。哲学とは、「世界・人間・事物などの根本原理を思索によって探究する学問」(明鏡国語辞典参照)であり、科学とは、「ある対象を理論や実証によって体系的に研究し、普遍的な真理を明確にする学問」(明鏡国語辞典参照)である。このことから、私は、現在使われている意味の哲学は人の思想によるものが多く、実験で証明するのではなく、科学や物理学などは実験により証明されるという違いがあるため区分されるようになったと考えた。

[要点]哲学とは英語で philosophy。ギリシア語で「愛(フィリア)+知恵(ソフィア)」と言い、プラトンが最初に使った言葉である。哲学に対するよくある誤解例としては目に見えるものが実在だ、と思込んでいることだ。実際、実在は目には見えない。また19世紀末まで江戸時代の蘭学者・英学者は philosophy を「理学」「物理学」と訳していたことも明らかだ。そして学の歴史を理解するためには、その時代時代の学の全体像をとらえることが必要になる。

[意見]哲学を訳すと philosophy ということは知っていたが、まだまだ知らない事だらけだど気づいた。そのためこれならの授業で哲学についてもっと学び、自分に少しでも生かしたいと考える。

コメント [y55]: たとえぼどんなことですか？

歴史的にみると、自然科学は哲学から派生したものである。自然科学における研究の問題意識や前提は、哲学に由来するものが多い。そもそも哲学(=philosophy)とはギリシア語の「愛(フィリア)+知恵(ソフィア)」というプラトンが最初に使った言葉であり、「哲学」という訳語は西周によるものであった。

また、哲学に対する誤解を人々は多々持っている。例を挙げるなら「正しさは人それぞれだ」「個人の経験によっても何でも決まる」「目に見えるものが实在だ」といったものだ。しかし実際は、「正しさは普遍的」「経験に先立つものがある」「実際は目に見えない」のである。そして、現代につながる哲学用語の大部分を作った哲学者アリストテレスの著作は自然学、形而上学、政治学、倫理学、心理学、動物学、天文学などおよそすべての知識の領域であり、これらは12世紀以降、西ヨーロッパに伝えられて諸学の基礎となった。近世の哲学も同様に、「われ思う、ゆえにわれあり」で知られるデカルトの著作も方法序説、省察、宇宙論、人間論、屈折光学、幾何学、心理学といった、やはり、およそすべての知識の領域となっている。

また、19世紀末まで、philosophyは、現代で言うところの自然科学という意味であったため、江戸時代の蘭学者・英学者たちは philosophy を「理学」「物理学」などと訳していた。つまり、philosophy は実際は「総合科学」とでもいうようなものであり、通常の哲学史とは、プラトン、アリストテレス、デカルトなどの著作の、現代から見て「哲学」に見えるものをつなげて作ってあるのである。

哲学と聞くと思想家のことが真っ先に思い出されるが、自然科学との密接な関わりがあることを初めて知った。哲学に対する誤解を私自身持っていたので、正しく理解し、先人たちの教えを学んでいかなければならない。

「哲学(Philosophy)」は、ギリシャ語の愛(フィリア)と知恵(ソフィア)が由来で、プラトンが最初に使ったと言われている。哲学に対するよくある誤解として、「正しさは人それぞれだ」「個人の経験によってなんでも決まる」「目に見えるものが实在だ」などが挙げられるが、実際は「正しさは普遍的」「経験に先立つものがある」「实在は感覚できない」のである。また、アリストテレスやデカルトの著作から、哲学はおよそすべての知識の領域と関連していることが分かる。そして、これらの著作をつなげて作ったものが「哲学史」であり、実際には、Philosophy は「総合科学」というようなものだった。

今まで哲学と自然科学は別物であると思っていたが、歴史的にみると密接に関わっていることが分かった。

- ・哲学は、ギリシア語の愛と知恵が語源となっている。
- ・日本語では、難しい言葉も、英語にすることで意味がとりやすくなることがある。
- ・哲学の古代でも近世でも様々な分野の知識が合わせられている。

物事の多面的理解は、正しく考えることだと学んだため、アリストテレスやデカルトが多

分野をそれぞれ現在の結論の近くまで、深く研究できたのは、多角的な視点を持っていたからだと気づいた。そのため、哲学を学ぶことで他分野から、知識をもらうということの手本を学ぶことになりそうだ。

「哲学(=Philosophy)」とはギリシア語の「愛」と「知恵」から成る言葉で、紀元前から使われていたが、日本では19世紀に入ってから使われ始めた。

哲学において、正しさは普遍的である。さらに、経験に先立つものがあり、また、実在は目に見えないものだが、これらはよく誤解されがちである。

哲学というものは、紀元前でも近世でも、アリストテレスやデカルトなどの著作の領域は多岐に渡っている。19世紀末までは、「Philosophy」とは現代でいうところの「自然科学」の意味であった。しかし、通常の「哲学史」とはプラトンやアリストテレス、デカルトなどの著作から、「現代から見て哲学に見えるもの」をつなげて作っているのである。

「哲学」という言葉には、奇妙な歴史があるように私は思った。現代における哲学には当てはまらないような分野も、かつては含まれていた。しかし、どのような過程から現代の「哲学」になっていったのかが気になる。

「Philosophy」は直訳すれば「知識愛好」となるが、単に「知識愛好」と言えば、特に子れといった分野を問うわけではないように聞こえる。実際、かつてはそうだった。しかし、現代では理学や物理学などは「哲学」には入らない。なぜそうなったのだろう。

そこで、「哲」という漢字を調べてみた。「哲」には、「さとい」、「賢い人」、「徳のある人」などという意味がある。これらは目に見えてわかるものではなさそうだ。形而上のもののみを指している。西周によって「Philosophy」が「哲学」と訳されたために、後世の人々は、漠然とした言葉で言えば、「目に見えないものを追究する学問」と捉えるようになったのかもしれない。そして、現代の哲学となったのだと推測する。

哲学は人生、世界、事物の根源の在り方、原理を理性によって求めようとする学問。

哲学は西洋においておおよその学問の根幹にあり、多くの著名な哲学者はその生涯において非常に多くの学問にわたって著書を執筆している。古代ギリシアの哲学者アリストテレスが万学の祖と評されるように哲学者は非常に多くの学問に対して見識があったのである。なぜか、それは古代中世ヨーロッパにおいて文法学、修辞学、論理学、算術、幾何、天文学、音楽がリベラル・アーツ(自由七科)として大学で必修であったことからわかるように、現代における自然科学などといった諸学問は、哲学から派生し生まれたため、哲学者にとってそれらの学問はすべて自分の専門領域内であったのである。19世紀ごろまで

コメント [y56]: なぜ科学の歴史でなく、「哲」という文字を調べたのでしょうか？

philosophy が自然哲学という意味だったということからも哲学と自然科学の密接な関係が見て取れる。時代が下って科学には science という単語が充てられて現在のような単語表現になったが、かつての philosophy は現在における「総合科学」と同義であるのである。

小難しく分かりにくい学問であるというイメージが取り払われた感じがした。やや違うかもしれないが徳島大学総合科学部自体が西欧における哲学から派生した諸学問(すべてとは言わないが)を学ぶことができる環境にあるのではないか。これはとても素晴らしいことである。ぜひこの講義の内容を自分の知識としていきたい。

コメント [y57]: がんばってください。

哲学は自分勝手な主観を論じるものではなく普遍性を目指すもの。なので正しさは人それぞれだというのは間違いであるという話がありました。

では、その正しさの基準、普遍性の基準とはどこにあるのでしょうか?自分の中では OK であっても他者からしたら NG、などの善悪、正義非正義などの価値観はやっぱり人それぞれなのではないのでしょうか?

今後の講義の中でも自分なりに哲学におけるの普遍性について考えてみたいと思います。

コメント [y58]: では、自分の中で「盗み OK、殺人 OK」なら、OK になるのですか? 「好み」というような意味での価値観なら人それぞれでかまいませんが、善悪正邪は「人それぞれ」ではないでしょう。

哲学という言葉はギリシア語の愛(フィリア)と知恵(ソフィア)からできた、フィロソフィアという言葉が西周が日本語訳したものである。もともと哲学は自然科学的な意味合いで使われていたが、現代では現代から見て「哲学」に見えるものとして区別されている。私は講座を受講して、なぜ「哲学」という言葉の使われ方が時代が移るに連れて変化していったのが気になった。

コメント [y59]: まずは調べ、知ることから始めましょう。

西洋哲学の基本概念や問題について。

「哲学」とは→ギリシア語のフィリア(愛)+ソフィア(知恵)が合わさった言葉であり、Philosophy とつづる。プラトンが最初に使ったとされ、「哲学」と訳したのは西周である。しかし「哲」は賢い、つまり知恵という言葉の訳であり、「愛」の意味が「哲学」には無い。そのため実際には「希哲学」という訳が最も正しいとされる。

哲学に対する正しい認識は

- ・正しさは普遍的
- ・経験に先立つものがある
- ・実際は目に見えない(感覚できない)

「学(=知)」は普遍を目指す。例えばアリストテレスは自然学や形而上学、心理学などほぼすべての知識の領域に通じていた。

Philosophy は自然科学や物理学と訳されることがあった。実際には「総合科学」というようなものであり、そこから諸科学が派生した。

私は高校時代に倫理を学習していなかった。そのため西洋の学者どころか日本の学者もあまり詳しく知らないが、哲学に関する考え方の違いは、その国や時代の背景をよく考察すべきだ。例えば西周が「哲学」と訳したのは、「愛」をマイナスのイメージで考える仏教の考えが強く影響しているからだ。

Philosophy は哲学と訳されるが、19世紀まで自然科学という意味だった。

わたし自身、経験はすればするほど、人は変わると思っていたが、哲学は経験に先立つものがあるということを知り、考え方が変わった。

「『正しさは普遍的』と授業を通して学んだが、普遍的という意味は『すべてのものに共通しているさま』」であり、初めて聞いたことであった。したがって、理解が難しかった。

この講義の目的は、西洋哲学の基本的概念の学習である。「哲学」という言葉の語源の学習から始まる。そして、哲学が歴史上で自然科学から分離して出来上がった学問という性格からも伺えることだが、昔の哲学者があらゆる学問に通じていたということから、哲学はあらゆる学問に通じているのだ。

さて、ここで私の意見を述べていくが、哲学の本来の意味とは、現代のような生きる意味を考えるということよりもさらに広範な、物事を深く観察し見つけ、普遍的なことを見つけることではないかと考えている。なぜならば、哲学は自然科学の元であったという歴史を持つからだ。両者はともに、物事を深く見つめることで、普遍のものを見つけようとしているからだ。両者の違いといえば、見つめる対象が異なることである。よって、哲学の本来の目的は、自称事象の観察と、普遍的な法則の発見にあると思われる。

哲学とは、決して現実から遊離したものではなく、むしろ諸科学の根源とも言える「総合科学」であり、普遍的な知の体系である。この歴史を理解するためには、哲学と科学を区別して考えず、時代時代における学問の全体像を把握する必要がある。

哲学が自然科学とも言うべきものだったことは理解したが、江戸時代に philosophy が理

学、物理学と訳されていたのにも関わらず、いつから哲学は科学と分離して捉えられるようになったのだろうか。時代が進むにつれて哲学に属する「学問」が増加し、細分化する必要が生じたのだろうか。

追記 高校の頃、受験に必要であること、また個人的に興味があったことから倫理を学びましたが、ところどころ理解できない箇所があり、結果としてただひたすら暗記することになってしまいました。高校時代の数多い後悔の一つです。こんなこと書いたらゴマすりやお世辞のように見えてしまうかも知れませんが、山口教授が今執筆しているとおっしゃっていたやさしい哲学についての本が無事刊行されることを願います。

まとめ:「哲学」とは:ギリシャ語の愛(フィリア)と知恵(ソフィア) **philosophy**

哲学は普遍的で経験に先立つものもあり、感覚できない。

意見:<哲学>という言葉はよく耳にするがまだ1回目の授業だけでは理解できなかった。

今回の総合科学の基礎 C の講義では、西洋哲学の基本を学習した。哲学の語源は、ギリシア語の愛と知恵であり、「知識愛好」を意味している。それは、ほとんどすべての知識の領域を学ぶことを欲し、且つ、その知識は普遍であることを目指す。そして、哲学の中では正しさも普遍的であるという。私はこの「正しさは普遍的」という考え方に、はじめは違和感を覚えたが、講義の中で理解することができた。まず違和感を覚えた理由として、正しさは個人の今までの経験に基づく解釈によって異なると思っていたからだ。しかし、この講義中に挙げられた、70年にわたる研究でチンパンジーが人語を話すことは不可能であると明らかになっているという例を聞いて、非常に納得した。個人が正しいと思うことは、過去の学者や研究員などによってはっきりとした証拠が示され、広く一般的な考え方として定着し、正しいと当たり前になっていることなのである。したがって、正しさが人それぞれで異なるのは、個人の知識量に差があるからであり、個人の経験とは関係がないのだ。そのため、普遍的な知識の量を増やし、正しさを見極めることが重要になってくる。

我々は、哲学について「正しさは人それぞれだ」「目に見えるものが実在だ」といったような誤解をしがちである。だが、哲学では正しさは普遍的であり、実在は目に見えない。西洋哲学の基本概念を多く的人是しく理解していない。代表的な哲学者であるアリストテレスは自然学や政治学など、およそすべての知識の領域を研究した。また同じくデカルトも哲学者としてよく知られているが、宇宙論や心理学など、やはりすべての知識の領域を研究した。実は、哲学 **philosophy** という単語は19世紀末まで、現代でいう「自然科学」を意味していた。「哲学史」や「科学史」といったものはアリストテレスやデカルトなど、

現代から見て哲学に見えるものをつなげて作られている。ここで私は考察したのだが、19世紀になるまで、世の中の自然科学的な諸事象がほとんど解き明かされていなかった。例えば、**何故太陽は沈むのか**、といった謎である。それらの謎を探求(哲学)し、原理や仕組みを研究(自然科学)する必要があった。そのため哲学と自然科学は同様のものではあったのだろうと**思う**。

コメント [y60]: すでに古代ギリシアで地動説は唱えられていました。1600年代にはすでに常識となっていました。ニュートンの万有引力の法則も1600年代。

今回の総合科学の基礎 C は哲学の基本的な事についての講義だった。哲学において正しさは普遍的であるということ、また哲学から諸科学が派生していった。という内容だった。講義の中で様々な学問が哲学の下位区分だということが話されており、私は他の学問と哲学の関連性について知りたいと考えている。私は特に**哲学と倫理学**の関係性について知りたい。高校で倫理を履修していた私は、その中で今回の講義で登場したアリストテレスやデカルトをはじめとした多くの哲学者について学び、講義を受けるまで倫理学と哲学はほぼ同じものだと考えていたので、倫理学のこういったところが哲学に属し、こういったところが倫理学独自の部分なのか私には分からないからだ。

コメント [y61]: 哲学は「正しい知識」についての学問。倫理学は「正しい行為」についての学問。

哲学とは自然科学のもの形態であり、個人個人によって左右されるものではなく、**感覚できないものである**。通常の「哲学史」や「科学史」はプラトンなどの著作の現代から見て「哲学」をつなげて作ったものであり、「学の歴史」を理解するには時代時代の全体像をとらえる必要があります。この講義を通して、何故十九世紀まで「自然哲学」という意味であった **philosophy** という単語が、現代では哲学という意味になっているのかということ疑問に**思いました**。私が**思う**に、自然科学が諸科学に派生するにつれて自然科学という単語に含みきれない分野が出て来てしまったからだと思います。その根拠は、**philosophy** は総合科学のようなものであったからです。

第一回の講義では、「Philosophy」という語の誕生と、この語の持つ意味合いが西周の訳した「哲学」というものになる以前に「自然科学」、「総合科学」といった総合的な意味合いを含んでいたということを学んだ。また哲学者たちにおいても、彼らは幅広い知識体系を築いていたということを知った。これを踏まえ、これからの講義で哲学者たちの考えを学んでいく際、単に高校の倫理で学んだことの延長として知識をつけたそうする姿勢ではなく、時代背景やその時の社会の状況などを鑑みながら一から学び、より深い理解ができるような姿勢で聴講していきたい。

今回の授業では、自然科学は哲学から派生してきたということを学んだ。また、フランスの**大学入試高校卒業資格試験**では、哲学が科目として、長時間にわたって自分の考えを論述するという事も知った。

しかし、それらはどうやって**採点や評価**がされているのだろうかという疑問が生じた。日本でも、小学校で、道徳が教科となり、評価の仕方が議論されていた。文部科学省初等中等教育局教育課程課によると、「道徳科の評価は、道徳科の授業で自分のこととして考えている、他人の考えなどをしっかり受け止めているといった成長の様子を丁寧に見て行う、記述による励まし、伸ばす積極的評価を行います」と述べられている。このように、正しさは普遍的であり、それら进行评估することは困難であるため、フランスの**入試高校卒業資格試験**でも、日本の道徳の評価と同様に、記述によって、哲学に関する自分の意見を考える様子を評価しているのではないかと**考える**。

参考文献

文部科学省

www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2017/05/25/1379579_001.pdf

①授業内容の要点

- ・この授業の目的
 - 西洋哲学の基本概念を知ること、哲学についての大まかなものを知る。
 - 論理的な文章を書けるようになる。
- ・哲学とは
 - 西洋においては、自然科学を含む全ての知識を追求し研究する学問
- ・哲学の目的
 - 真理の獲得

②意見

- ・哲学は全ての学問追求の根幹を担っていると考える。

③②の根拠

・以前から、私は哲学とはそれ一つの学問の枠組みで考えるべきものではないと考えていた。何故なら、哲学は思考を追求する学問であり、そして科学にしる、文学にしる、全ての学問は思考を追求することで成り立つものだから(現象に対する疑問を解決するためにそのことについて思考するから)、哲学とは全ての学問追求において必須の素養だと考えていたからである。よって以上のように意見した。

コメント [y62]: 授業で言いましたが、「形式」重視です。関連する基本文献に言及されているか、引用の形式が適切か、反対の立場が考慮されているか、きちんと結論が出ているか、などの点が評価されます。おおむね、『コピペと言われないレポートの書き方』で学ぶような書き方ができれば、高評価になります。

コメント [y63]: せっかくですから、今回学んだことを踏まえて考えるようにしましょう。

今回の授業の要点は西洋哲学の基本理念を通じて、哲学がどのような問題意識からどのような問題を扱ってきたのかを学ぶということであった。

哲学の大まかな歴史を扱っていたがその中で「言語が概念をつくる」と出てきた。そして、言語が先かそれとも概念が先に存在したのかを疑問に思った。

言語と概念は相互に作用するものである。言語で名づけることで思考が深まり、また新しい言語へと繋がっていく(言語と記号による)。私は概念のほうが先に存在すると考える。名づける**工程過程**の中で、言語は人間の概念に作用しているが言語が表れるにはその言語の意味が先にあるはずであるし、言語は言語自身で言語を作ることはできず実際に言語を作っていくのは人間自身であるからだ。

参考文献 丸山圭三郎 『言語と記号』

コメント [y64]: 私の『人間科学の哲学』で詳しく論じていますので、読んでください。

哲学—philosophy—とはそもそも、日本語で愛という意味のフィリア・知恵という意味のソフィアが組み合わさってできた言葉だ。この philosophy という語は 19 世紀末まで現代の自然科学の意で用いられていた。

そして哲学とは、物事の本質を捉え理解し推論していく学問である。

哲学や他の学問においても、正しさの尺度は人それぞれということではなく普遍的で、実在しているもののほうが目に見えなかったりする。

授業の中で「フランスの高校では、日本のような倫理ではなく哲学が教科として存在する。」という話題が取り上げられた。私は高校で哲学を学ぶことに賛成で、それはなぜかという哲学自体を勉強するというだけでなく、それに付随して、物事を客観的に洞察する力や硬い文章を読み解く力、命題について自分の意見を述べ・記す力を学ぶこともできるからだ。社会に出て必要なこれらのことを、高校のうちに学べる機会はとても重要である。

「哲学」とは、philosophy:ギリシャ語の「愛(フィリア)+知恵(ソフィア)」のことであり、現代でいうところの「自然科学」という意味だった。プラトンが最初に使った言葉であり、「哲学」という訳語は、西周によるものである。

哲学には、よくある誤解がある。例えば、「正しさは人それぞれだ」→「正しさは普遍的」や、「個人の経験によってなんでも決まる」→「経験に先立つものがある」や、「目に見えぬものが実在だ」→「実在は目に見えない(間隔できない)」などがあげられる。

近世の哲学では、デカルト:「われ思う、ゆえにわれあり」があげられる。彼の著作は、

方法序説、省察、宇宙論、人間論、屈折光学、幾何学、心理学などがある。やはり、ほぼすべての領域である。

通常の「哲学史」は、プラトン、アリストテレス、デカルトなどの著作の、現代から見て、「哲学」に見えるものをつなげて作っている。これは、「科学史」も同様である。

実際には、philosophy は、「総合科学」とでもいうようなもので、そこから諸科学が派生してきた。「学の歴史」を理解するためには、哲学と科学といった現代的な区分を前提とせず、その時代時代の学の全体像をとらえることが重要である。

また、「学」は、普遍を目指す。

「哲学者」アリストテレスの著作:自然学、形而上学、政治学、倫理学、心理学、動物学、天文学などである。やはり、デカルト同様ほぼすべての領域である。アリストテレスの諸著作は、19世紀以降、西ヨーロッパに伝えられ、諸学の**きそ基礎**になった。現代につながる哲学用語の大部分を作ったのは、アリストテレスである。

哲学とは正しさは人それぞれであるから、個人の経験に即した解釈ができるというものではない。正しさは普遍的であり、経験に先立つものがある。哲学はギリシア語で Philosophy といい、これはプラトンが初めて使った言葉であり、愛(フィリア)+知恵(ソフィア)の意味を持つ。19世紀末まで、Philosophy は、現代でいうところの物理学という意味であった。万有引力や地球の自転などは当たり前のことであるが、その根拠や仕組みを知覚することはできない現象である。哲学も同様に、根拠や仕組みを知覚することができない。